筧の話

梶井基次郎

私は散歩に出るのに二つの路を持っていた。一つは渓(たに)に沿った街道で、もう一つは街道の傍から渓に懸った吊橋(つりばし)を渡って入ってゆく山径だった。街道は展望を持っていたがそんな道の性質として気が散り易かった。それに比べて山径の方は陰気ではあったが心を静かにした。どちらへ出るかはその日その日の気持が決めた。しかし、いま私の話は静かな山径の方をえらばなければならない。

吊橋を渡ったところから径は杉林のなかへ入ってゆく。杉の梢(こずえ)が日を遮(さえぎ)り、この径にはいつも冷たい湿っぽさがあった。ゴチック建築のなかを辿(たど)ってゆく

ときのような、犇ひしと迫って来る静寂と孤独とが感じられた。私の眼はひとりでに下へ落ちた。径の傍らには種々の実生や蘚苔、羊歯の類がはえていた。この径ではそういった矮小な自然がなんとなく親しく――彼らが陰湿な会話をはじめるお伽噺のなかでのように、眺められた。また径の縁には赤土の露出が雨滴にたたかれて、ちょうど風化作用に骨立った岩石そっくりの恰好になっているところがあった。その削り立った峰の頂にはみな一つ宛小石が載っかっていた。ここへは、しかし、日がまったく射して来ないのではなかった。梢の隙間を洩れて来る日光が、径のそここ

こや杉の幹へ、蠟燭（ろうそく）で照らしたような弱い日なたを作っていた。歩いてゆく私の頭の影や肩先の影がそんなかへ現われては消えた。なかには「まさかこれまでが」と思うほど淡いのが草の葉などに染まっていた。試しに杖をあげて見るとささくれまでがはっきりと写った。

　この径を知ってから間もなくの頃、ある期待のために心を緊張させながら、私はこの静けさのなかをことにしばしば歩いた。私が目ざしてゆくのは杉林の間からいつも氷室（ひむろ）から来るような冷気が径へ通っているところだった。一本の古びた筧（かけひ）がその奥の小暗いなか

からおりて来ていた。耳を澄まして聴くと、幽（かす）かなせせらぎの音がそのなかにきこえた。私の期待はその水音だった。

　どうしたわけで私の心がそんなものに惹（ひ）きつけられるのか。心がわけても静かだったある日、それを聞き澄ましていた私の耳がふとそのなかに不思議な魅惑がこもっているのを知ったのである。その後追いおいに気づいていったことなのであるが、この美しい水音を聴いていると、その辺りの風景のなかに変な錯誤が感じられて来るのであった。香もなく花も貧しいのぎ蘭（らん）がそのところどころに生えているばかりで、杉の根方

はどこも暗く湿っぽかった。そして筧といえばやはりあたりと一帯の古び朽ちたものをその間に横たえているに過ぎないのだった。「そのなかからだ」と私の理性が信じていても、澄み透(とお)った水音にしばらく耳を傾けていると、聴覚と視覚との統一はすぐばらばらになってしまって、変な錯誤の感じとともに、訝(いぶ)かしい魅惑が私の心を充たして来るのだった。

　私はそれによく似た感情を、露草の青い花を眼にするとき経験することがある。草叢(くさむら)の緑とまぎれやすいその青は不思議な惑わしを持っている。私はそれを、露草の花が青空や海と共通の色を持っているところか

ら起る一種の錯覚だと快く信じているのであるが、見えない水音の醸(かも)し出す魅惑はそれにどこか似通っていた。

すばしこく枝移りする小鳥のような不定さは私をいらだたせた。蜃気楼(しんきろう)のようなはかなさは私を切なくした。そして深祕はだんだん深まってゆくのだった。私に課せられている暗鬱な周囲のなかで、やがてそれは幻聴のように鳴りはじめた。束(つか)の間の閃光(せんこう)が私の生命を輝かす。そのたび私はあっあっと思った。それは、しかし、無限の生命に眩惑(げんわく)されるためではなかった。私は深い絶望をまのあたりに見なければならなかった

のである。何という錯誤だろう！　私は物体が二つに見える酔っ払いのように、同じ現実から二つの表象を見なければならなかったのだ。しかもその一方は理想の光に輝かされ、もう一方は暗黒の絶望を背負っていた。そしてそれらは私がはっきりと見ようとする途端一つに重なって、またもとの退屈な現実に帰ってしまうのだった。

筧（かけひ）は雨がしばらく降らないと水が涸（か）れてしまう。また私の耳も日によってはまるっきり無感覚のことがあった。そして花の盛りが過ぎてゆくのと同じように、いつの頃からか筧にはその深祕がなくなってしまい、

私ももうその傍に佇（たたず）むことをしなくなった。しかし私はこの山径を散歩しそこを通りかかるたびに自分の宿命について次のようなことを考えないではいられなかった。

「課せられているのは永遠の退屈だ。生の幻影は絶望と重なっている」

底本：「檸檬・ある心の風景」旺文社文庫、旺文社
１９７２（昭和47）年12月10日初版発行
１９７４（昭和49）年第４刷発行
入力：j.utiyama
校正：福地博文
１９９８年11月27日公開
２００５年10月３日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。